

## クリスティナ・ロセッティの抒情詩にみる 仮定法と直説法の機能

藤田 晃代

### 序

日常会話のみならず、多くの英文学作品において広く用いられている仮定法は、語りの場面で効果を発揮する一方、英語学習者にとって重要かつ「難関」といわれる文法項目のひとつであり、「事実と反対のことを仮定して述べる方法」というひと言でまとめられがちである。学習者が仮定法の例として初めに習う仮定法過去について、『ロイヤル英文法』においても「現在の事実と反対の仮定、または現在または（原文ママ）未来についての可能性の乏しい想像を表す」<sup>(1)</sup>と説明されている。英語辞典では*Oxford Advanced Learners' Dictionary*において仮定法とは「願望、可能性、不確実性などを表す動詞の形と（法）」<sup>(2)</sup>と定義されるが、ともすれば仮定法は直説法との関連づけから学ばれることは少なく、条件節および帰結節に用いられる直説法とは異なる動詞ないし助動詞の時制にのみ注意して繰り返し練習することに重点が置かれ、学習者にとって難解かつ特別な文法事項であるという印象をぬぐい切れない。本稿では19世紀イギリス、ヴィクトリア朝時代（1837-1901）を代表する詩人のひとりであり、生涯にわたって多くの詩作を行なったクリスティナ・ロセッティ（Christina Rossetti, 1830-1894）の作品のなかでも特に1850年代の抒情詩に注目し、仮定法と直説法の機能から読み解いていく。クリスティナ・ロセッティの抒情詩の多くは一人称の語り手によってなされるが、彼女の抒情詩における仮定法の使用についてまず特徴的なのは、直説法から仮定法、仮定法から直説法への語りの転換が頻繁に行われる点である。クリスティナはその抒情詩において、直説法と仮定法を現実と想像という単に二分される世界を描く手法というよりもむしろ、ともに語り手による現状認識の裏付けと同時に願望と喪失感を表裏一体に表現するものとして用いている点を以下、明らかにしていく。

## I クリスティナ・ロセッティの抒情詩について

### i 1850年代のクリスティナ

クリスティナ・ロセッティの詩を読み解くにあたって、まずは彼女の詩人としての生涯とその時代から論を始める。生涯にわたって虚弱体質であったクリスティナ・ロセッティだが、彼女の詩人としての活動期は繁栄を極めたヴィクトリア朝時代とほぼ重なっている。クリスティナが出版を意識した本格的な詩作を始めた1850年代、当時の大英帝国は繁栄の一方で国内に抱えた深刻な貧困や社会問題、植民地に頼る「経済政策」と多くの矛盾と混迷を抱えた状態にあった。そしてこの時代にイギリスが経験したクリミア戦争 (Crimean War, 1853-56) も忘れるべきでない歴史的事実であるが、1850年代はクリスティナ個人にとっても単に「波乱含み」とだけでは言いきれない状況を抱えた時代であった。クリスティナの1850年代は、兄ダンテ・ガブリエル (Dante Gabriel) はじめラファエル前派の会員による同人誌『芽生え』 (*The Germ*) に数編の詩を寄稿するという文学的活動から幕を開けたものの、婚約者ジェイムズ・コリンソン (James Collinson) との宗派の違いによる破局、亡命イタリア人であり、ロンドンに移住してからはずっと大学で教鞭をとっていた父親の死、母親と共同で始めた学校経営の失敗、さらには叔母に触発されてフローレンス・ナイチンゲール (Florence Nightingale) の看護部隊に志願するも年齢と経験不足を理由に断られ、<sup>(3)</sup> その後は体調不良に苦しむといういわば挫折と苦難の日々であった。クリスティナの詩作全般に関して、Betty S. Flowersは「ロセッティは比較的物静かな、敬虔な生活を送ったものの、その生活は同時代の文学や政治的影響から離れていたものであったとみなすのは間違いであろう」と述べている。<sup>(4)</sup> 若いころから古典やゴシック小説、ロマン派の詩人の詩に親しみ、父親を介した亡命知識人との交流もあり、後には同時代の文学者と交流をするなかで彼女の詩作が行われた背景を考えれば、クリスティナ作品には多様な主題が取り上げられていることが十分理解できる。その一方で、個人の心情をうたい上げた抒情詩を多く残し、先に挙げた1850年代の彼女の詩作に失意や喪失感を主題にしたものが多くみられるのも、19世紀ヴィクトリア朝の家父長制の下、女性が未だ抑圧されることの多かった時代背景や社会状況とともに、クリスティナ自身を取り巻く状況が全く反映されていないとは言い切れないだろう。

## ii 抒情詩とその主題

クリスティナ・ロセッティと抒情詩の関係についてはこれまで主にフェミニズム的視点からの研究がなされてきたが、Susan Conleyは彼女の抒情詩の特性について「厭世的かつ憂鬱な語り手の強固すぎる使用」<sup>(5)</sup>を指摘し、Dolores Rosenblumは「19世紀の女性詩人はとりわけ満たされない願望、喪失、自己犠牲そしていたみを通して願望への執着について描き、ときには生から死、死から生へと状況の終末論的反転を導く」<sup>(6)</sup>と述べ、クリスティナの作品を19世紀の家父長制の文脈から逃れきれない女性詩人の立場からとらえている。また、抒情詩の語りの構造についてはJonathan Cullerが「カギとなる問題は、詩を描く作者の行為と話し手またはそこで話す“声”との関係にある」<sup>(7)</sup>と指摘した上で、「詩を語るのは作者ではない、描くことで作者は彼／彼女自身あるいは他者がそれを語っていると想像しているのだ」<sup>(8)</sup>と続け、詩人は詩の語り手に自らの声を仮託していることを強調している。本稿においても、一人称の語り手はすべてクリスティナが語り手に仮託した声という立場から論を進め、先に挙げた願望そして喪失という主題をクリスティナが作中でどのように表現しているか、仮定法の機能を直説法との関連から考察する。

## II 直説法現在と仮定法過去

### i 近接する直説法と仮定法

クリスティナ・ロセッティの抒情詩では、仮定法と直説法がきわめて近接した関係で用いられている点から論を進める。直説法と仮定法の関係について、冒頭にも挙げた『ロイヤル英文法』では、まずは単なる条件を示した条件文について「条件節が表す条件の内容によって、直説法が使われたり、仮定法が使われたりする」<sup>(9)</sup>点に触れた後、仮定法について「条件節には可能性が五分五分のような仮定を表す条件（開放条件）と、事実と反する仮定を表す条件（却下条件）がある」<sup>(10)</sup>と続けている。一方、千葉修司氏は仮定法の研究において「仮定法は一般的に現実の世界ではなく、仮定（または架空）の世界を表す言語表現であるので、そこに表された仮定や条件の内容は、現実の世界においては成立しない（あるいは成立しにくい）ことが前提となっているのが普通であるが、場合によっては（中略）そのような前提が否定される（すなわち、棚上げされる）こともある」<sup>(11)</sup>と述べており、いずれの場合も、出来事の叙述をめぐって直説法と仮定法

がきわめて相互に近接した関係にあることを示唆しているといえる。以下にクリスティナ・ロセッティの抒情詩にみられる直説法から仮定法、仮定法から直説法への転換について論じる。なお、あらかじめおことわりしておかなければならない状況として、クリスティナ・ロセッティの用いた英語は後期近代英語に属するものであること、<sup>(12)</sup> 英詩の性質上、必ずしもすべて条件節と帰結節が揃った仮定法を扱うわけではないことを挙げておく必要があるため、ここに記述する。

## ii 直説法現在から仮定法過去への転換

クリスティナの抒情詩における直説法から仮定法への転換についてまずは初期の作品を考察する。古代ギリシアの女性詩人サフォーを語り手に据えた抒情詩“Sappho”(1846)では、恋人を失ったサフォーが失意のなかで嘆き、歌う。日ごと夜ごとに嘆くサフォーは直説法現在形の動詞“sigh”を繰り返し用いて歌い始める。

I sigh at day-dawn, and I sigh

When the dull day is passing by.

I sigh at evening, and again

I sigh when night brings sleep to men. (1-4)<sup>(13)</sup>

繰り返される動詞“sigh”によってサフォーの嘆きが響きわたるかのように始まる第一連であるが、“sigh”には「ため息をつく」の他「風がそよぐ」という意味もあることから、抒情詩 (lyrics) の語源でもある豎琴 (リラ) に合わせて歌う抒情詩人の息が風に乗って伝えられる様子も想起される。直説法によって歌い手が直面する失意を事実としてうたい上げた直後、語りは仮定法過去へと転換される。

Oh! it were better far to die

Than thus for ever mourn and sigh [.]<sup>(14)</sup> (5-6 斜体は筆者による)

“for ever mourn and sigh” (6) とは来たる1850年代、クリスティナ自身に降りかかる一連の出来事を予見するかのような語句であるが、仮定法過去の一節 “[I]t were better far to die” (5) は現状から逃れて死を望む語り手サフォーの切なる思いを表す一方で、失意を抱いたまま詩人として生き続けることを定められたサフォーの「現状認識」を裏付けた言葉ともいえ、後半の語りは、直説法と仮定法過去双方によって展開していく。

And in death's dreamless sleep to be  
 Unconscious that none *weep* for me;  
 Eased from my weight of heaviness,  
 Forgetful of forgetfulness,  
 Resting from pain and care and sorrow  
 Thro' the long night that *knows* no morrow[.] (7-12 斜体は筆者による)

続く7行目に前の5行目がまだかかっていると考えて読んだ場合，“It were better far to be in death's dreamless sleep.”という内容に解釈することができ、ここではまだ仮定法過去が生きているとわかる。しかし、次の行の動詞“weep”はthat節の主語“none”が通常複数扱いになることから直説法現在形であることも考えられ、12行目に登場する動詞“knows”から明らかのように語りは再び仮定法から直説法へと転換されている。ここで注目すべきは8行目から12行目にかけて、直説法で語られる内容はまた語り手サフォアの苦しみから逃れて永遠の眠りに就きたいという叶わぬ願望をも表している点である。千葉修司氏は「直説法の文でありながら、仮定法過去の文によく似た文が存在すること」<sup>(15)</sup>を指摘し、「このような文は、過去に起こった出来事や事柄を事実と認めたうえで、〈それならば〉（それが事実ならば）、かくかくしかじかのことが起こった（あった）に違いない」という推測の気持ちを表すのに用いられる」<sup>(16)</sup>点を強調しており、抒情詩においては語り手がその心情を語るのにしばし過去時制ではなく現在時制が用いられ、クリスティナの抒情詩では直説法現在においても仮定法過去同様、現状認識と同時に語り手の喪失感、願望が表現される点を次に見ていく。

### iii 喪失と願望の詩と直説法、仮定法

1853年に連作として描かれた抒情詩編“Seasons”（1853）の一つ，“Two Parted”では一人称の男性の語り手が登場し、前述の“Sappho”同様、失った恋人を嘆いてうたい上げるところから始まる。

“Sing of a love lost and forgotten,  
 “Sing of a joy finished and o'er,  
 “Sing of a heart core-cold and rotten,  
 “Sing of a hope springing no more.”—

— “Sigh for a heart aching and sore.”— (1-5)

各行の冒頭において動詞“sing”が第一連1行目から4行目まで繰り返された後、5行目で“sigh”に転じる。これらの動詞はともに前述の詩“Sappho”にみられる抒情詩人の歌声を想起させるものでもある。語り手は「彼女」の心について「芯は冷たく腐敗した」(3)と告げ、語り手の悲嘆と同時に「彼女」に対する絶望が募っていく姿を強調する。しかし最終連では悲嘆及び絶望と同時に未だに「彼女」を忘れることのできない語り手の思いが直説法現在から仮定法過去への転換によって語られる。

“Still in my dreams she *comes* tender and gracious,

“Still in my dreams love *looks* out of her eyes:

“Oh that the love of a dream *were* veracious,

“Or that thus dreaming I *might* not arise!” (11-14 斜体は筆者による)

「彼女」は夢の中でまだ語り手のもとを訪れる。夢で逢う「彼女」の姿は語り手が現実世界で求めている姿である。ここでは夢の出来事が直説法現在で語られることから、語り手がむしろ夢を現実の出来事として語る姿がうかがふ。続く仮定法過去は夢が本物であったならば、という願望だけでなく、実際には「彼女」をすでに失っている「現状の認識」を裏づけてもいる。“Or that thus dreaming I might not arise!” (14) という一節には、語り手の現実世界における喪失感と同時に最終的には死の世界へと向かう願望がうかがえ、“Two Parted”では直説法と仮定法の連続性そして直説法の仮定法的な意味合いが語りの効果を引き出している。

“Two Parted”の語りにおいては直説法が仮定法的な意味合いで用いられていたが、仮定法が直説法的に用いられる例を次に取り上げる。1854年に描かれた“From the Antique” (1854) は、クリスティナの抒情詩のうちでも最も強くフェミニズム的テーマがうたわれたものといえる。この詩は第一連の冒頭のみが直説法現在で語られ、あとは全て仮定法過去による語りが続く。語り手は「無力な存在」として位置づけられた女性の立場からうたい始める。冒頭では三人称の女性の語り手を登場させた直後、一転して一人称の語り手に転じるため、語り手は臨場感を持った効果を生む。

It's a weary life, it is; she said:—

*Doubly blank in a woman's lot;*

*I wish and I wish I were a man;*

*Or, better than any being, were not:* (1-4 斜体は筆者による)

一行目で直説法現在を用い、女性として生きることを「[d]oubly blank」「二重に空白」(2)と表現し、続く仮定法過去ではもし男性であったなら、と叶わぬ願望を述べているが、ここには同時に「無力な存在である女性」という語り手が直面する現状も表されている。さらに語り手は「無力な存在」であることを仮定法過去でうたい続ける。

*Were nothing at all in all the world,*

*Not a body and not a soul;*

Not so much as a grain of dust

*Or drop of water from pole to pole.* (5-8 斜体は筆者による)

語り手は叶わぬ願望に続けて自身も「存在しないもの」になることを願う。無力な存在に加えて、肉体も魂もすでに地上には無い「非存在」への願望は究極的には死への指向である。しかし、第三連では語り手が存在しなくなった後も何事もなかったかのように続いていく日常世界が言及される。

Still the world *would* wag on the same,

Still the seasons go and come;

Blossoms bloom as in days of old,

Cherries ripen and wild bees hum.

None *would* miss me in all the world,

How much less *would* care or weep:

I *should* be nothing; while all the rest

*Would* wake and weary and fall asleep. (9-16 斜体は筆者による)

語り手は生きているあいだも小さな存在にすぎず、なきあとはその存在はやがて忘れ去られ、存在自体が無かったことになる。しかしそれでも世界は存続していく。第四連では語り手が自らを主語に助動詞“should”を用いる一方、存続する世界を表現するのに繰り返される助動詞は“would”である。この二つの助動詞がそれぞれ運命的なもの、語り手の意思を表すことから考えると、この世界を嘆く悲痛な思いというより諦観、そして現実に対する究極的な客観視が見てとれる。ここにいたって“From the Antique”にみられる仮定法過去は直説法に近い意味で用いられていることがわかる。無力な存在として位置づけられた女性を語り手に据えたこの詩は「非

存在への願望」を主題としつつ、仮定法にうたい込んだ内容はむしろすべて語り手の現状認識を表すという点できわめて直説法的な意味合いを持つと言えよう。

### Ⅲ 三つの抒情詩と直説法と仮定法

#### i 抒情詩“By the Water”

“By the Water” (1856) は四連から成る抒情詩としてはOxford Classics版に収録されている。<sup>(17)</sup> 語りは直説法現在で始まり第一連後半から第二、第三連と仮定法過去でうたわれた後、最終連で再び直説法現在に戻る構成をしている。詩は語り手が目前の水に浮かぶ睡蓮の花を船に見立て、船出を想起するところから始まる。

There are rivers lapsing down  
Lily laden to the sea;  
Every lily is a boat  
For bee, one, two, or three:  
I wish there were a fairy boat  
For you, my friend, and me. (1-6)<sup>(18)</sup>

友人との「船出」は旅立ちへの願望を意味すると同時に、現実からの逃避でもある。「過去」や「現在」という時間的制約からも、希望や不安といった人生における心情の移り変わりもない、生きていることすら意識する必要のない世界が語られていく。現実から遠く離れた世界に運んでくれる「妖精の船」に言及する語り手からは現実からの逃避だけでなく、現実から背を向けることで夢をそこにあるものとして希求する姿が見てとれる。Oxford Classics版収録の詩では次の第二連が挿入される。

And if there *were* a fairy boat  
And if the river *bore* us  
We should not care for all the past  
Nor all *that lies* before us,  
Not for the hopes *that buoyed* us once  
Not for the fears *that tore* us. (7-12 斜体は筆者による)<sup>(19)</sup>

「妖精の船」に乗って旅立つ思いを語った連であるが、10行目以降、語り手による判断が述べられるthat節では直説法に移行していき、最終連で夢から覚め、現実に戻った語り手は船の浮かぶ川も友人も消えたことを知り、



詩の語りは友をさがす直説法現在による言葉で締めくくられる。

But ah, where is that river  
Whose hyacinth bank descend  
Down to the sweeter lilies,  
Till soft their shadows blend  
Into a watery twilight? —  
And ah, where is my friend? — (19-24)

夢から覚めた語り手が最終連で探す川は土手のヒヤシンスが睡蓮の花開く川面まで咲きこぼれ薄暮のなかに渾然一体となるところとして描かれている。この現実世界から離れた場所は語り手の脳裏に浮かぶ、そこにはない場所である。現実にはない場所を思い描き、語ることからじまったこの詩は、最終連に至って第一連冒頭の水辺の場面から連続して語り手の夢を語っていた可能性が浮上してくる。水辺、船、友人、そこにはない存在とそれらを求めながらも、失ったからこそ願い求める想いをうたったこの抒情詩では、直説法、仮定法ともに語り手の願望と喪失を重層的に語るものとして機能している。

## ii “May”にみる語りの構造

クリスティナの詩では、直説法も仮定法同様に語り手の抱く願望そして喪失を表すものとして機能することはすでに述べたが、前述の詩のおよそ一か月前に描かれた抒情詩“May”（1855）は直説法のみを用いて語り手と「彼」をめぐる生と死の主題を喪失、願望とともに描き出す。

Sweet Life is dead —  
Not so:  
I meet him day by day,  
Where bluest fountains flow  
And trees are white as snow  
For it is time of May. (1-6)

冒頭の“Sweet Life”とは語り手のそれまでの人生であると同時に「彼」の存在を表しているだろう。“Sweet Life is dead”（1）とそれらが失われたことを断定した直後の否定“Not so[.]”（2）は語り手がずっと「彼」を思い続けていることを強調する。タイトルの“May”には五月という季節そしてメイフラワー（ホーソーン）の両方の意味が重なっているが、花の開

花につれて「彼」を想う語り手の言葉には、花の生命力と「彼」の存在が語り手のうちで一体化していることがうかがえる。続いて過去形で表現される第二連では一転して「彼」の死が冬という季節とともに第一連との対比で表現される。

But life is dead to me;  
The worn-out year was failing  
West winds took up a wailing  
To watch his funeral:

-----  
Chill darkness wrapped him like a pall  
And I am left alone. (12-22)

「彼」の死は語り手の人生における「喪失」でもあり、「彼」の亡き後残された語り手が直面しているものは孤独である。第二連では冒頭と最終行のみ直説法現在形で語られ、「彼」を亡くした過去の出来事とひとり残された語り手がその思いを語る現在との間には時間的な断絶と同時に直説法で描かれることで連続性が生じている。「彼」の死を体験した後、五月の花に「彼」の存在を感じ取る語り手にとって「彼」が想いの中に生き続けることは死を認めつつ、生を肯定する願いの表れである。

How can you call him dead?  
He buds out everywhere:

-----  
He crowns my willing head  
With may flowers white and red,  
He rears my tender heartsease bed;  
He makes my branch to bud and bear,  
And blossoms where I tread. (23-32)

第三連では主語が語り手から「彼」に取って代わることで語り手の「彼」に対する想いが一層存在感を増していることがわかる。「彼」の死と語り手が想い抱く「彼」の存在こそは「喪失」と「願望」をうたったという点では先に挙げた抒情詩“By the Water”の主題に合致するものであろう。すべて直説法でうたわれる“May”においても同様の構成が見られることは、クリスティナの抒情詩においては、語り手が体験する事実のみならず、語り手が実感できることがら、たとえ現実でなくてもそうありたい、そう

あってほしいと願うことがらは直説法で語られることを示しており、抒情詩“May”の直説法には仮定法的な機能も読み取れるのである。

### iii “Another Spring”と直説法, 仮定法

次に直説法的な意味合いの仮定法を語りの軸に据えた詩を考察する。1857年に描かれた“Another Spring”（1857）は、生きることに對して懐疑的な語り手の姿勢を表現した詩である。条件節に可能性を表す助動詞“might”が使われ、再びの春が巡ってくるかどうか、すなわち生きて春を迎えられるかどうか、語り手が思い続けてきたことが語られる。

If I *might* see another Spring  
 I'd not plant summer flowers and wait:  
 I'd have my crocuses at once,  
 My leafless pink mezerons,  
 My chill-veined snowdrops, choicer yet  
 My white or azure violet,  
 Leaf-nested primrose; anything

To blow at once, not late. (1-8 斜体は筆者による)

短い生命の花に自らの姿を託した語り手の言葉からは、花を愛おしく思う姿よりもむしろ短い命を憂う様子がうかがえる。「将来」へのあきらめという現状認識、喪失感そして厭世感が仮定法の条件節と帰結節で結ばれていく。しかし同時に「すぐに咲いて、遅くまで咲き続けない」(8) 花を求める語り手の「今」だけを生きようとする姿には、「今」を精一杯生きようという「願望」も見てとれる。

続く第二連では冒頭の条件節に続いて帰結節が繰り返され、語り手の願望はむしろ決意表明の様相を帯びてくる。

If I might see another Spring  
 I'd listen to the daylight birds  
 That build their nests and pair and sing,  
 Nor wait for mateless nightingale;  
 I'd listen to the lusty herds,  
 The ewes with lambs as white as snow,  
 I'd find out music in the hail  
 And all the winds that blow. (9-16)

語り手が耳を傾けるのは昼に鳴く鳥の歌、羊の鳴き声そして雹や風の音という、語り手の日常において「今そこに聴こえる音」である。これらはいずれも第一連の「早春に咲く花」すなわち語り手にとって身近にある花々と呼応する刹那的なものであろう。この瞬間聴こえるものに音楽を見出すことで、その時に生きる語り手には初期の詩“Sappho”がそうであったように、抒情詩人の姿が仮託されているとも考えられよう。各連の冒頭で繰り返される言葉“Spring”は「春」と同時に「泉」の意味をもつ単語でもあるため、詩想の源泉（ヘリコンの泉）を想起させることも重なり、語り手はこの瞬間をも詩人として生きることを表明しているとも解釈できる。

第三連に至って、語り手はこれまでの「過去」を振り返る。

If I might see another Spring —  
 Oh stinging comment on my past  
*That all my past results in “if” —*  
 If I might see another Spring  
 I'd laugh today, today is brief;  
 I would not wait for anything;  
 I'd use today that cannot last,

Be glad today and sing. (17-24 斜体は筆者による)

「今」に至るまで語り手の「過去」は仮定法で表現されてきたように「将来」に関する懐疑的な姿勢を持ち続けることの繰り返しであった。語り手のこれまでについて “[A]ll my past results in “if” — (19) と生き続けることへの懐疑、厭世感を抱いたまま生きてきたという認識がここでは直説法現在形で表現される点に再び注目する必要があるだろう。現状の認識を表現するのに一番基本的な直説法への転換であり、回帰である。クリスティナの抒情詩において直説法と仮定法は二分されるものではなく、常に表裏一体に機能し続けてきた。抒情詩“Another Spring”では語り手による現実認識に裏づけられた世界、そして語り手による決意表明がなされているという点できわめて直説法的な意味合いの仮定法が用いられており、このことは、クリスティナ・ロセッティの詩では、現実認識と願望、そして喪失感がともに直説法、仮定法双方で表現されていることも合わせて、二つの法の近接した関係を裏づけているといえる。

## 結

ヴィクトリア朝社会が大きく発展、変化した一方、クリスティナにとっては波乱だらけだった1850年代の抒情詩を直説法と仮定法の機能から読み解いてきた。仮定法は直説法と近接した関係にあり、いずれも語り手の「願望」そして「喪失」を表現する点では表裏一体をなすものであることが分かった。語り手の心情や立場は常にうつろう。直説法と仮定法に注意して読むことでまたそれらに語り手の心情やその揺らぎが反映されている点も読み取れる。直説法と仮定法が表裏一体となったクリスティナ・ロセッティの抒情詩は未だ制約の多かった家父長制の下で詩作をすることに自らの存在意義を見出そうとし続けた詩人の姿だけでなく、続く60年代、70年代の物語詩や宗教詩によって詩人としての地位を築いていく直前の模索も見てとれる。

## 註

- (1) 綿貫陽 編『ロイヤル英文法』第2版、東京、2004年、550頁。
- (2) “Subjunctive,” *Oxford Advanced Learners’ Dictionary*, (Oxford/New York : Oxford University Press, 1948, 6<sup>th</sup> ed. 2000) 1296.
- (3) Betty S. Flowers, Dinah Roeはじめ、複数のクリスティナ・ロセッティ研究者が言及するように、クリミア戦争勃発翌年の1854年8月、クリスティナはフローレンス・ナイチンゲールの看護部隊に応募したが、却下された。クリミア戦争当時、ナイチンゲール率いる看護部隊はオスマン帝国のコンスタンティノーブル、スクタリ（現在のトルコ共和国イスタンブール市ウスキュダル地区）において傷病兵の看護にあっていた。
- (4) Betty S. Flowers, “Introduction,” R.W. Crump and Betty S. Flowers, eds. *Christina Rossetti : The Complete Poems*, (London : Penguin, 2001) xli.
- (5) Susan Conley, “Rossetti’s Cold Women,” Mary Arseneau, Antony H. Harrison, and Lorraine Janzen Kooistra eds. *The Culture of Christina Rossetti : Female Poetics and Victorian Contexts*, (Ohio : Ohio University Press, 1999) 263.
- (6) Dolores Rosenblum, *Christina Rossetti : The Poetry of Endurance*,

- (Carbondale and Edwardsville : Southern Illinois University Press, 1986) 15.
- (7) Jonathan Culler, *Literary Theory : A Very Short Introduction*, 1997 (Oxford/ New York : Oxford University Press, 2000) 74.
- (8) Jonathan Culler, 74.
- (9) 綿貫, 『ロイヤル英文法』546頁。
- (10) 綿貫, 546頁。
- (11) 千葉修司, 「英語の仮定法について— その基本的特徴と仮定法現在」『英語の仮定法: 仮定法現在を中心に』東京, 開拓社, 2013年, 4頁。
- (12) クリステイナ・ロセッティの用いた英語が後期近代英語 (1700-1900頃) に属する点に注目して研究されるべきことについては, 筆者の研究発表 (欧米言語文化学会第11回年次大会) に於ける質疑の際に貴重な指摘をいただいた。
- (13) R.W.Crump and Betty S. Flowers, eds. *Christina Rossetti : The Complete Poems*, (London : Penguin, 2001) 613-614. (以下, 本稿における詩の引用は原則として同書による。“By the Water”のタイトルで1856年に発表された抒情詩に関しては, 論旨展開の都合上, Simon Humphries, ed. *Christina Rossetti : Poems and Prose*, (Oxford/ New York : Oxford University Press, 2008) 所収の詩を基にした。なお, 引用中のイタリック体はすべて筆者によるものとし, 引用詩の和訳はすべて筆者による拙訳とする。)
- (14) 現代英語であれば, 五行目の仮定法過去は “It would be better far to die[.]”と法助動詞を用いて表現されるところである。
- (15) 千葉, 「英語の仮定法について— その基本的特徴と仮定法現在」5頁。
- (16) 千葉, 5頁。
- (17) Simon Humphriesは, 四連のバージョン (Bodleian Version) について, “[T]his is one instance in which the shortening of a notebook version of a poem is not obviously an improvement.”と述べている。Simon Humphries, “Notes to Pages,” Simon Humphries ed. *Christina Rossetti : Poems and Prose*, (Oxford/New York : Oxford University Press, 2008) 422.
- (18) Simon Humphries, ed. *Christina Rossetti : Poems and Prose*, (Oxford/ New York : Oxford University Press, 2008) 54.

(19) Oxford Classics版では、この連が第二連として挿入されている。

### 参考文献

- Armstrong, Isobell. "Christina Rossetti—Diary of a Feminist Reading." Ed. Tess Cosslett. *Victorian Women Poets*. London / New York : Longman, 1996. 158-175.
- Arseneau, Mary, Antony H. Harrison, and Lorrain Janzen Kooistra. *The Culture of Christina Rossetti : Female Poetics and Victorian Contexts*. Ohio : Ohio University Press, 1999.
- Battiscombe, Georgina. *Christina Rossetti : A Divided Life*. New York : Holt, Rinehart and Winston, 1981.
- 千葉修司。「英語の仮定法について—その基本的特徴と仮定法現在—」『英語の仮定法：仮定法現在を中心に』東京、開拓社、2013年。1-74頁。
- Conley, Susan. "Rossetti's Cold Women." Ed. Mary Arseneau, Antony H. Harrison, and Lorrain Janzen Kooistra. *The Culture of Christina Rossetti : Female Poetics and Victorian Contexts*. Ohio : Ohio University Press, 1999. 260-284.
- Cosslett, Tess. Ed. *Victorian Women Poets*. London / New York : Longman, 1999.
- Culler, Jonathan. *Literary Theory : A Very Short Introduction*. 1997. Oxford / New York : Oxford University Press, 2000.
- Flowers, Betty S. "Introduction." Eds. R.W. Crump and Betty S. Flowers. *Christina Rossetti : The Complete Poems*. London : Penguin, 2001. xxxviii-xxlvii.
- \_\_\_\_\_. "Notes." Eds. R.W. Crump and Betty S. Flowers. *Christina Rossetti : The Complete Poems*. London : Penguin, 2001. 881-1176.
- Fujita, Akiyo. "A Study of Modal Auxiliary Verbs "Shall" / "Should" and "May" / "Might" in the Lyrics of Christina Rossetti." *Contexture* No.36. Saitama Institute of Technology, 2018. 15-30.
- Humphries, Simon. Ed. *Christina Rossetti : Poems and Prose*. Oxford / New York : Oxford University Press, 2008.
- \_\_\_\_\_. "Notes." *Christina Rossetti : Poems and Prose*. Oxford / New York :

- Oxford University Press, 2008. 401-495.
- Kooistra, Lorraine Janzen. *Christina Rossetti and Illustration : A Publishing History*. Ohio : Ohio University Press, 2002.
- Marsh, Jan. *Pre-Raphaelite Sisterhood*. London : Quartet Books Ltd., 1985.
- Mason, Emma. *Christina Rossetti : Poetry, Ecology, Faith*. Oxford : Oxford University Press, 2018.
- ピーターセン, マーク。『実践 : 日本人の英語』東京, 岩波書店, 2013年。
- Roberts, Phil. *How Poetry Works*. 1991. London : Penguin, 2000.
- Roe, Dinah. "Introduction." *Christina Rossetti : Selected Poems*. London : Penguin, 2008. xvii-xxxvi.
- Rosenblum, Dolores. *Christina Rossetti : The Poetry of Endurance*. Carbondale and Edwardsville : Southern Illinois University Press, 1986.
- Rossetti, Christina. *Christina Rossetti : Poems and Prose*. Ed. Simon Humphries. Oxford : Oxford University Press, 2008.
- \_\_\_\_\_. *Christina Rossetti : The Complete Poems*. Eds. R.W. Crump and Betty S. Flowers. London : Penguin, 2001.
- Rossetti, Christina G and William M. Rossetti. *New Poems by Christina Rossetti : Hitherto Unpublished and Uncollected*. 1896. London / New York : Macmillan, Montana : Kessinger Publishing, c2011.
- "Subjunctive." *Oxford Advanced Learners' Dictionary*. Oxford / New York : Oxford University Press, 1948 6<sup>th</sup> ed. 2000.
- 綿貫陽編。『ロイヤル英文法』第2版, 東京, 2004年。

(本稿は2019年9月1日に日本大学芸術学部にて開催された欧米言語文化学会第11回年次大会における筆者の研究発表を改題, 加筆修正したものである。)